熊本城 復興に向けて

〈8〉明治22年「金峰山地震」からの復旧

地震から3日後の明治22年7月31日に第六師団監督部長から陸軍大臣に提出された「震災損害届」によると、石垣の大規模な破損は激烈な震動のせいもありますが、明治10年の西南戦争で天守や御殿が火災となり石材が焼けて石質が脆くなっていたこと、さらに6月からの長雨で雨水が土中に浸み込んで地盤が緩んでいたことが崩壊の原因と結論付けています。火災で脆弱となった石材は現在でも天守周辺の各所で確認できます。本来角ばっていた石材の周縁がタマネギの皮を剥ぐように落下して丸く変形していて、こうした石材は今回の平成28年地震でも、震動によって擦れ合ってパリパリと簡単に剥離して落下しています。

地震後の第六師団の対応をみると、崩壊の可能性がある危険な石垣は押し崩すなどして対応していましたが、9月ごろには多額の修理費にもかかわらず、従来通りの城に修復するための復旧に着手します。10月には城内の石垣修築の請負募集がありましたが、業者間では「従来の石材をそのまま用いて修理せよ」という条件であるが、(熊本城の石材は)大石で普通の作業員ではとても不可能だという噂が立っています。当時の石垣は技術的には江戸時代の石垣技術の延長にありましたが、清正による築城期の石垣(自然石を粗割りした不揃いの大きな石材を使用)とは大きく異なり、「間知石」と呼ばれる立方体や四角錐状に加工した規格材を積み上げる技術に変貌していました。こうした石材は小型化が図られていて重量も軽いので扱いやすく、形状が単一であるため、熟練度が高くなくても手早く積めるという利点がありました。

明治になり陸軍が駐留することになった熊本城では古い石垣も大事にされましたが、駐屯地に必要な新規の石垣工事も行われています。その好例となるのは明治8年頃に陸軍病院の玄関前(現熊本医療センター駐車場南斜面)に構築されている高さ12m天端長16m根元長26mの石垣です。この石垣は前述の間知石を使ったもので、反りを持たせた石垣となっていて、明らかに清正時代の石垣をモデルに再現したものです。熊本鎮台の熊本城に対する熱い思い入れをうかがわせます。

▲耕作櫓門跡のタマネギ状剥離のある石垣

▲明治8年頃陸軍病院玄関前に築造された「清正流石垣」

地震で崩壊した石垣の修理はこの明治時代の石積み技術が用いられています。清正時代の石垣とははっきりと区別できるので、明治の崩壊箇所の8割が今回の地震の崩壊箇所と重複することが判っています。小天守穴蔵、数寄屋丸御門、奉行丸南東隅、櫨方北側などの石垣では、元の高さに戻さずに高さを少し省略し、南大手門の東側櫓台のように通行の利便を考慮して根元から石垣を撤廃した事例もあります。しかし6年後には復旧を完了したとみられ、その実績を示す写真も7枚ほど残されています。

この時の第六師団の頑張りがなければ、特別史跡となる現在の熊本城跡は存在しなかったことでしょう。

(熊本城調査研究センター　鶴嶋 俊彦)